大田区立熊谷恒子記念館版 記念館ノート

第１０号
発行：2026 年 3 月 31 日
編集：大田区立
熊谷恒子記念館

馬込アートギャラリー（大田区南馬込 4-10-4）に熊谷恒子関連常設展を開設

熊谷恒子記念館近隣に馬込アートギャラリーが 2026 年 2 月 1 日に開館しました。2 階常設展では、熊谷恒子の愛用品を中心に展示し、かな書の基礎である熊谷恒子の折手本『いろは帖』を公開しています。（展示期間：2026 年 2 月 1 日～6 月 28 日）

館のトピック

◆地域連携プログラム「東京手描友禅　染色の技巧」を開催（会期：二〇二六年二月二十五日～四月五日）

熊谷恒子記念館では、かなの美展「熊谷恒子と『万葉集』―晩年までの荘重な書―」（会期：二〇二五年十二月二十日～二〇二六年四月五日）を開催しています。そして、同展開催期間に地域連携プログラムを併催します。着物愛用家の恒子が女性書家初の勲五等宝冠章を受章した翌年の一九六八年に開催された祝賀会で着用した訪問着は、糊疋田（のりひった：鹿の子文様の絞り技法）で紫松模様が特徴的です。また、恒子が一九八二年頃に米寿祝賀会に着用した訪問着は、藤色の地に摺箔（すりはく：型紙の文様に箔を擦る技法）装飾の格式高い礼装です。地域連携プログラムでは、このような恒子が大切にしていた訪問着とともに、大田区伝統工芸士・町田久美子（まちだくみこ）氏の東京手描友禅の着物や帯などを紹介しています。

大田区馬込出身の町田氏は、東京染色美術専門学校を卒業後、東京友禅の職人・故長澤龍二氏に師事し、二〇一九年に大田区伝統工芸士に認定され、二〇二五年には国の伝統工芸士試験を合格しました。本展では、長忌寸意吉麻呂（ながのいみきおきまろ）が詠んだ万葉集の和歌を題材に酒を交わす鯛の粋な図柄や、歌川国芳の金魚をモチーフに盆踊りの洒落た模様の和装を展示します。東京手描友禅による染色の伝統技法を用いた町田氏独自の図案を、恒子の書や訪問着とあわせて公開します。

地域連携プログラムの展示風景

かなの美展の展示風景

2026 年度の予定

○かなの美展「熊谷恒子の原点―『古今和歌集』を中心に振り返る―」
会期：4 月 18 日（土）～9 月 27 日（日）　※会期中に一部作品入替
○熊谷恒子没後 40 年企画展「熊谷恒子と京都江馬家」
会期：10 月 17 日（土）～11 月 29 日（日）
○かなの美展「熊谷恒子と旧宅築 90 年（仮称）」
会期：12 月 19 日（土）～2027 年 3 月 22 日（月・休）予定
○地域連携プログラム「絽（ろ）ざし　艶麗な日本刺繍（仮称）」
会期：2027 年 2 月 23 日（火・祝）～3 月 22 日（月・休）予定

※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

大田区立熊谷恒子記念館
〒143－0025 大田区南馬込 4－5－15
TEL　03－3773－0123
URL　https://www.ota-bunka.or.jp/kumagai/

《入館案内》
●開館時間　午前 9 時から午後 4 時 30 分まで
●入館料　一般 100 円、中学生以下 50 円
※65 歳以上（要証明）、未就学児及び障害者手帳等をお持ちの方とその介護者 1 名は無料
●休館日　毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始、展示替えの臨時休館

熊谷恒子と実兄・江馬務が語る京都江馬家

大田区立熊谷恒子記念館　学芸員　飯島　千尋

はじめに

熊谷恒子（一八九三～一九八六）は、昭和期にかな書の第一人者として活躍した人物である。恒子の生家である江馬家は、江戸中期から始まり、岐阜にある美濃大垣藩主侍医の江馬家の分家にあたる。恒子の曽祖父である江馬榴園（りゅうえん　一八〇四～一八九〇）は、本家の二代目江馬蘭斎（らんさい　一七四七～一八三八）の養子となり、京都で開業した。恒子は、このような代々医者の家系である江馬家の次女として京都に生まれた。本稿では、二〇二六（令和八）年に恒子が没後四十年となる節目に伴い、恒子が兄・江馬務（一八八四～一九七九）とともに暮らした京都江馬家を振り返る。

恒子は、前野良沢（一七二三～一八〇三）に師事した蘭学医師の蘭斎が始めた種痘（天然痘の予防接種）について「そのときはたいへんなんです、おっかなびっくりしている人もあるし、本当に信用しない人もあるでしょう」（註1）と述べている。務は「和蘭（オランダ）の医法はこの頃はまだ誰も知らない時代であったため、人々は恐れて診療を乞うものなく、蘭方医（乱暴医）と悪罵した」と当時の蘭学を説明し、「京都西本願寺法主文如上人（もんにょしょうにん）がたまたま難病で百方手をつくして癒えず久しく悩まれていたが、蘭斎の名声を聞き、美濃から招き診療を受けられたところ、立ちどころに癒えた」と蘭斎が一七九八（寛政十）年に西本願寺の文如上人の病気を治し有名になったと『江馬家と私を語る』（註2）に記述している。恒子の祖父である江馬天江（一八二五～一九〇一）の没後五十年に際し、務が江馬家の親戚に贈呈した『江馬家と私を語る』を参考に、京都江馬家を紹介する。

一　京都江馬家について

蘭斎の要望により京都江馬家を創立した榴園は、一八四四（天保十五）年に京都仁和寺門跡（小松宮彰仁親王一八四六～一九〇三）侍医を務めた。務は、「殊に種痘の必要を認めて有信堂なる団体を創立してその普及」（註3）に尽力したと榴園について述べている。また、京都江馬家の二代目・天江は、一八六八（明治元）年に明治政府の行政官吏官に出仕し、明治改元の詔勅の文案（註4）を作成した。そして、翌年に京都へ戻り、一八六九（明治二）に開校した私塾立命館（現・立命館大学）の初代塾長となった。内閣総理大臣となった西園寺公望（一八四九～一九四〇）（註5）と天江との関係を、「公望は自宅に漢学の塾を創立して、有為なる人材を集め、国家有用の人物を養成するつもりであったので、天江をその塾の長に依頼せんためにかく熱心に訪れた」（註6）と務は回想している。

さらに、恒子の父である章太郎（一八五八～一九一四）は、天江の長男として、順天堂病院で医学を学び、京都府立医学専門学校（現・京都府立医科大学）の教授に就任した。章太郎について、務は「医を志した時には榴園は既に七十八歳の老年であり、天江は文人生活をして医を継ぐ志がなかったので、榴園の家を嗣ぐことを遠慮し、父章太郎が何うしても榴園の家を継がねばならなかった」（註7）と回顧している。章太郎について、恒子は「私の父は京都で医者をしてゐましたが、非常に書の好きな人でした。従って昔風の氣質も手伝って、母にも私達兄弟にもやかましくいつてお習字をさせたものでした」（註8）と振り返る。恒子は、一九一四（大正三）年に東京へ転居するまで、京都江馬家のもとで兄妹とともに過ごした。

二　熊谷恒子と京都江馬家

京都市立第二高等女学校卒業後に稽古としてはじめた習字について、恒子は「母と姉と私とが、その時分は電燈がなくてランプでね、ランプを真ん中へ置いて、いちばん涼しい部屋で三人がお習字をする」（註9）ことが日課だった。その当時の務について、恒子は「お手本は、兄が本屋で見つけてくれた。小野我堂先生の筆による『雁のたより』という和綴の三冊本で、内容は手紙文であった」（註10）と大正時代にかな書の大家であった小野我堂（一八六二～一九二二）の書を学んでいた。

一九六七（昭和四十二）年、女性書家初の勲五等宝冠章を受章した恒子は、兄・江馬務とともに同時受章した。恒子について、務は「書道の部で日展の審査員をやっていますが、多少の心得はあったにせよ、嫁に行ってからの手なぐさみが今の彼女を作ったようです。私は勲四等瑞宝章、妹は勲五等宝冠章を同時に授与され、兄妹で同時とは珍らしいと喜ばれました」（註11）と振り返っている。

熊谷恒子と京都江馬家（中央に恒子、左から母・信子、父・章太郎、兄・務、姉・貞）
1898年頃、大田区立熊谷恒子記念館蔵

おわりに

京都江馬家で親しんできた恒子と務は、ともに蘭学のほか、漢詩や書等の教養を身につけた。とくに書の品格を大切にしてきた恒子は「書というものに対しては子供の時から非常に関心が高かったですね。好き嫌いというよりも家庭の雰囲気が自然とそういう風にさせた」（註12）と京都江馬家の家庭環境のもと、書に関心を持ち、かな書道の発展に注力した。

註

（1）熊谷恒子・高橋雅夫「江馬家のこと（インタビュー）」『江馬務著作集　付録　第十三回別巻』中央公論社、一九八二年六月

（2）江馬務「江馬家を語る　上・前編　第二章　美濃江馬本家（大垣江馬）」『江馬家と私を語る』京都女子大学厚生課、一九五一年二月

（3）江馬務「江馬家を語る　上・前編　第三章　江馬家の由来」『江馬家と私を語る』京都女子大学厚生課、一九五一年二月

（4）明治政府首脳だった岩倉具視が所蔵していた明治改元詔勅案文は、一九〇二年に江馬家へ譲られた

（5）西園寺公望が一八六九年、京都の私邸に私塾「立命館」を創始し、一九〇〇年に公望の秘書・中川小十郎が私立京都法政学校（現・立命館大学）を設立

（6）江馬務「江馬家を語る　上・前編　第五章　父母　江馬正太郎・信子と私等」『江馬家と私を語る』京都女子大学厚生課、一九五一年二月

（7）江馬務「江馬家を語る　上・前編　第四章　下坂家と江馬天江」『江馬家と私を語る』京都女子大学厚生課、一九五一年二月

（8）熊谷恒子「書道立志の動機」『北辰会ゝ報』一九三六年

（9）註1と同じ

（10）江馬務「七十年の追憶」『風俗　日本風俗史学会会誌』第十四巻第二号、日本風俗史学会、一九七五年十二月

（11）熊谷恒子「私の転機」『朝日新聞』、一九八四年二月二十八日夕刊

（12）「現代書の巨匠　熊谷恒子　崇高なまでの精神美」『書道芸術』日本美術、一九八六年十一月

※無断転載・複製を禁ず。